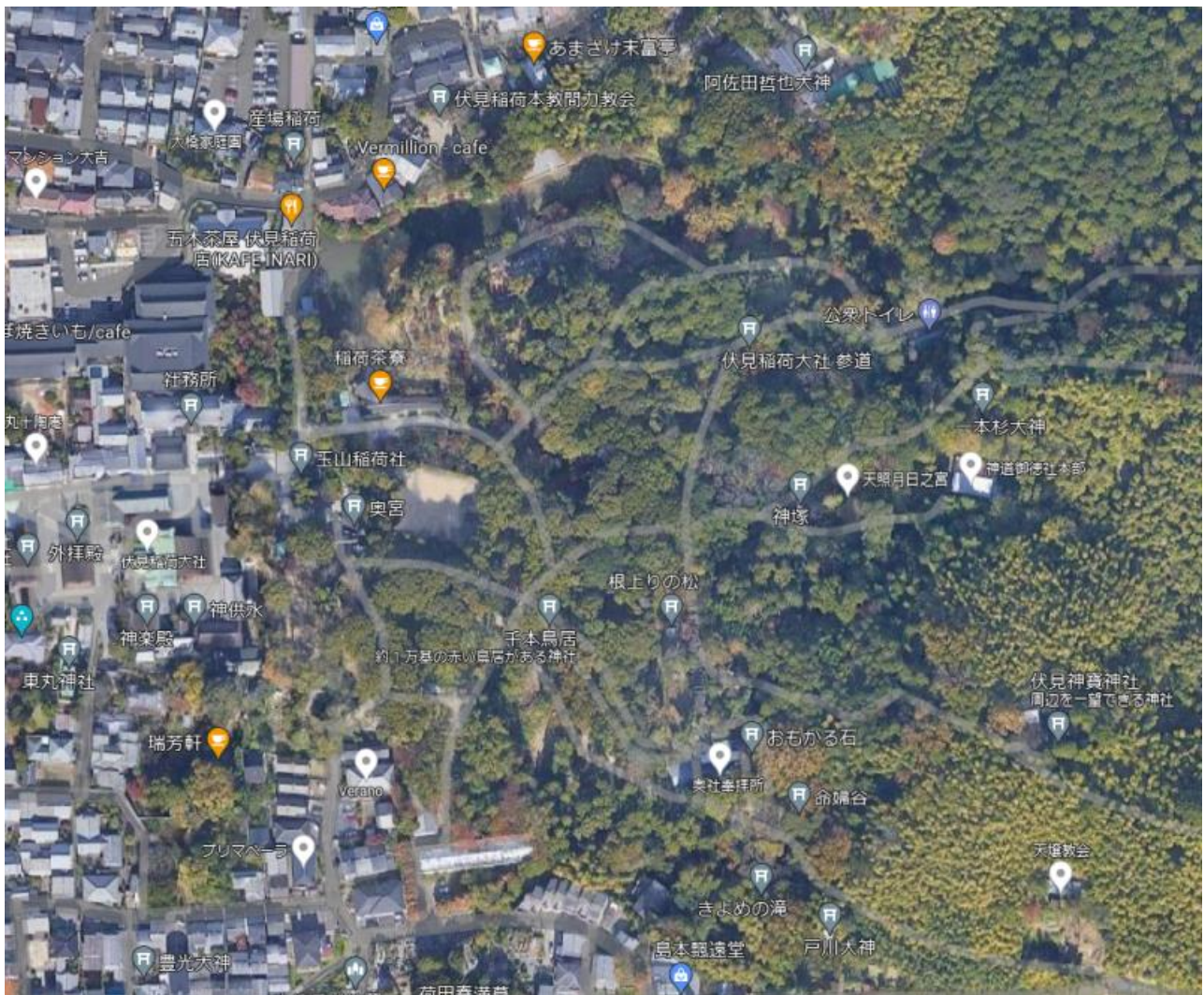


写真アルバムから

シリーズC 寺社華風月 (白黒)

C6 伏見稲荷・鞍馬寺 1975

森隆一



稲荷山 (Google Mao)

C6. 伏見稲荷・鞍馬寺 1975

伏見稲荷 1975

伏見稲荷へ市電で行った記憶がある。このとき、市電と郊外電車が平面で交叉した。稲荷線は1970年に伏見線と共廃止されたということから、これは学生時代のことのようにだ。交叉は1回と記憶しているので、疎水の手前に停留所があったはずである。1975年は京阪電車で行ったことになるが、記憶にない。



上の写真は、楼門を横から撮ったものである。この写真を撮る時、赤フィルターを用いた。空が白くとんでしまう空の対策として、青色を吸収するという効果の最も高い赤フィルターを付けたものである。

結果的には、暗いところがつぶれ、白くとんでしまう空に表情がついた。空対策としては、赤フィルターは効果が強すぎ、オレンジあるいは黄がいいのではないかと思ったが、これは殆ど試みなかった。

この原理的な解説を探したら「[カラーフィルタの中の光学](#)」がみつかったが、容易に理解できなかった。

Wikipedia「カラーフィルタ」では

カラーフィルタは、電磁波に対するフィルタのうち、主に可視域に作用する光学フィルターで、色（波長の違い）に対する特性を目的とするもの。一般的なフィルタと同様、例えば帯域に対する特性で分類するとハイパス・ローパス・バンドパス・バンドストップ等となるが、各種のものがある。

写真レンズなどに装着する各種のレンズフィルターの一つで、写真の場合、カラー写真では全体の色の傾向を調整し、白黒写真では色によって濃淡を異ならせるといった効果がある。フィルム側の分光感度に合わせた調整や、特殊なものとしては単色のフィルタにより色収差を抑え込むといった手法などもある。

と書かれている。

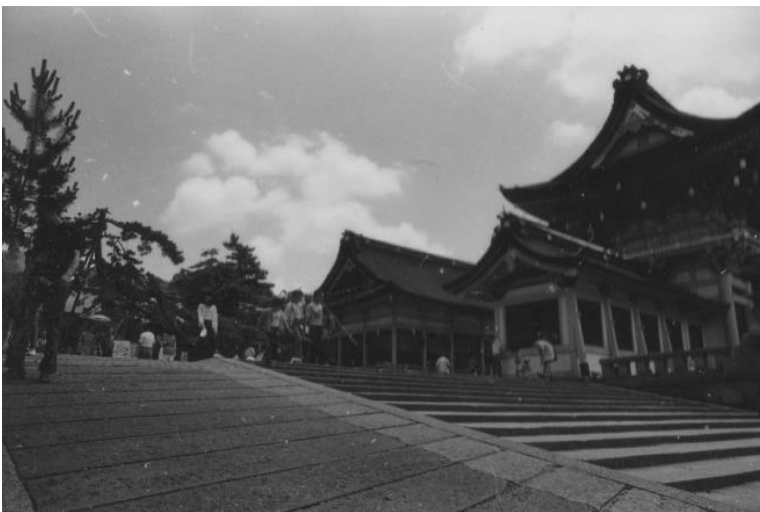
α -sight web 「[カラーフィルター効果](#)」では

カラーフィルター効果とは、ある特定の波長(色)を吸収し、残った光(色)を透過しより際立たせて見せる効果です。

例えば色料の三原色の一つである黄色のフィルター（レンズ）では、短波長の光（青）を吸収し、吸収されなかった波長の光(色)を透過します。

なぜ海の水は青く、湖の水は緑なのか？で説明した水の色もこの原理で、青く見える水の色は、赤の波長を吸収し反対色である青が強調され青く見えます。

と書かれている。



上右の写真は楼門前のキツネ像を通常に撮影したものである。左の写真は、赤フィルターを付けて、楼門より引いた場所で撮ったものである。似た写真を見つけるのは難しいが、強いて言えば、満月の夜の写真で、

空を明るくしたものが近いのではないかと思う。この夜景のような暗所がつぶれた写真はこれで面白いのだが、画面の構成力は簡単には身に付きそうもない。



楼門の石段を登ると、
本殿が現れる。

ここで2本とったのが、
現像ミスで真っ黒になって
しまった。

現像液に浸すのを忘れて、定着液に浸けたものと思われる。これは、技術の習得過程において、ある程度慣れてきたときによく起きる現象である。初めは、マニュアルを見ながら、あるいは、用意周到な人は手順のメモを見ながら、慎重に行う。手順を覚えた頃に上記ミスが、起こり易い。もう少し慣れると、手順を跳ばした場合、何か変だという感じになることが多い。パブロフの犬現象の完成である。また、高名な木登りの話も頭に浮かんだ。

本殿の背後から、近年有名になった、千本鳥居が始まる。鳥居並木の

幾つかの写真を掲げる。撮影場所の詳細は記憶していない。

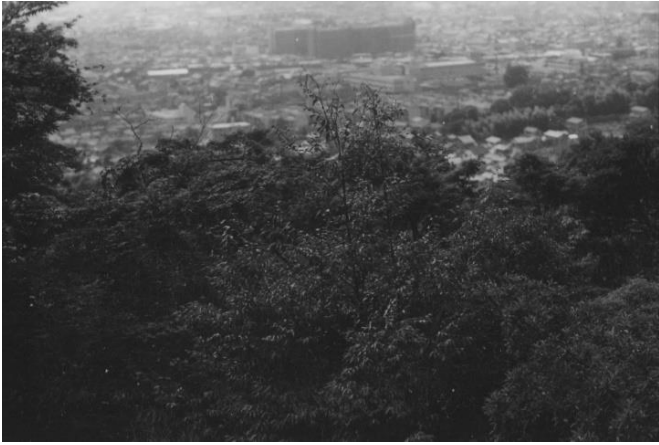
ウィーク・デイとはいえ、少し待てば、このように人の殆どいない写真を、当時は、撮ることが出来た。





鳥居並木が一段落した辺りから、視界がやや開け、点在する摂社か末社とそれらを結ぶ道が続くき、稻荷山山頂に到る。





ここで、次の写真を撮っていた。右上の写真は、上の上段の写真と同じ位置で撮ったものと思っている。

もともと雲を眺めるのは好きであった。雲は常に動いている。同じような状況は、待てば、得られるかもしれないが、全く同じものは得られない。



下の写真を上右の写真をトリミングしたものである。



次の写真は裏山(稲荷山)めぐりを終えて、伏見稲荷の北側の人家で撮ったものである。



左の写真の犬は、写真の状態、頭まで1mを超える大型犬である。このくらいの犬になると、悠然としていて、そのまま通り過ぎるには問題がない。繋がれていることは確認したが、内心ビビリながら1m程に近づき、ノーファインダで写した。

右の写真は、ずっと‘知恵の輪くぐり’と思ってきたが、これは間違いで、‘茅の輪くぐり’というようである。似た書き方で2つのサイトを見つけた。

「茅の輪くぐりとは？意味・由来・作法とくぐり方・大祓との関係を解

説」

「[茅の輪くぐりとは？](#)2022年に行われるのはいつ？」

後者では、

6月も終わりに近づいた頃、神社に草木で作られた大きな輪が設置されているのを見たことはありませんか？それが「茅の輪（ちのわ）」です。この茅の輪をくぐることを「茅の輪くぐり」といいます。

と書かれているので、6月の中旬から下旬の間に出かけたようである。

鞍馬寺 1975

鞍馬で連想するものは、鞍馬天狗程度であろうか。マイナーでは鞍馬石もある程度かもしれない。それよりも、北山散策の起点あるいは終点のほうで知っている人もいるかもしれない。

京都市内から鞍馬寺へは、出町柳から叡電に乗るのが普通である。

終点の鞍馬で降りると、下の写真左の鞍馬寺山門の石段下になる。



山門から本堂伽藍へは、ケーブルカーを用いるか徒歩で行くかの2通りの方法がある。この時の記憶では、徒歩の人は殆どなく、殆どの人はケーブルカーを用いていたようである。

写真を撮りながら、時々煙草を吸って、歩いていくと、本堂伽藍に辿り着くのに2時間ほどかかった。



上の写真は、本殿(金堂)より南東を眺めたものである。本殿はコンクリート造りで、写真を撮る気がしなかった。調べたら、本殿は昭和 1945 年に焼失し、 1971 年に再建されたとのことである。

鞍馬寺のホーム・ページでも、建物の呼称に堂と殿が入り混じっているが、主要なものは殿のようである。本殿金堂とも書かれている。



左の写真は、本殿前に置かれている(青銅製?) 燈籠である。

かなり大きなもので、このような燈籠が本堂の前に設置されている例としては、東大寺の大仏殿(本堂?)が思い浮かんだ。ちなみに、思いつく順に、東西本願寺・知恩院を Google Map で見てみたが、

3 寺ともに設置されていた。

次の写真は、本堂の軒下に飾られている吊り行灯である。

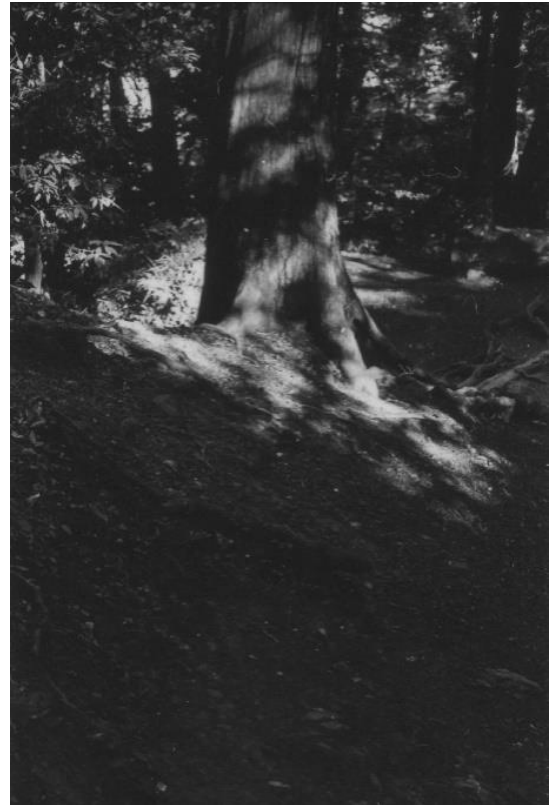
ずっと提灯と思っていたが、よく見れば、伸び縮みしそうでないということで行灯に変えた。神社では吊燈籠が置かれている。



この後、奥の印へ向かう路を歩いたのだが、何処まで行ったのかは覚えていない。Google Map では、木の根道・僧正谷不動堂・奥の院魔王殿

などが記されている。

次の写真の右は、木の根道で撮ったものと思われる。右の写真は、少し登った開けた所で、本殿伽藍を撮ったもののようである。



木の根道に踏み込んだ時には、少なからず驚き何か神秘的なものを感じた。考えてみれば、根はもともと地中で成長するものである。これが地表に何故現れているのか。普通に考えれば、覆っていた土が流されたことによるのではないか。土砂崩れが起きたとも思えない。人が歩くことにより、草が生育せず、土が流されたということしか思いつかない。

では、そんなに人が通ったのか、あるいは、どの程度の人が通れば、じつげんするのか、など疑問がうかんでくる。

また、源義経と金売吉次のはなしがある。Wikipedia「金売吉次」では平治物語では奥州の金商人吉次、平家物語では三条の橘次と云し金商人、源平盛衰記では五条の橘次末春と云金商人、義経記では三条の大福長者で吉次信高としている。

吉次は都へ上り、鞍馬寺を参詣し源義経と出会う。平治物語では、義経から奥州への案内を依頼される一方、義経記では吉次から話を持ちかけている。吉次は義経と共に奥州へ向かう。下総国で義経と行動を別にするが、陸奥国で再会する。吉次の取り計らいにより、義経は藤原秀衡と面会する。吉次は多くの引出物と砂金を賜り、また京へ上ったという。

実際に吉次なる人物が実在したかどうかは、史料的に吉次の存在を裏付ける事が不可能であるため、彼の存在は伝説の域を出ず、まったくもって不明である。しかし当時の東北地方が金を産出し、それを京で取引していたのは明らかになっている。吉次なる人物のように金を商っている奥州からやって来た商人がいた事は想像に難くない。したがって現在では、こうした商人の群像の集合体が金売吉次なる人物像として成り立ったのではないかと考えられる事が多い。また、岩手県宮古市田老地区の乙部には、彼の弟とされる吉内の子孫である吉内家があると書かれている。

上の引用文より、‘奥州の金商人(三条の橘次と云し金商人)吉次は鞍馬寺を参詣し源義経と出会う’ということになっている。金商人の吉次が鞍馬寺にどうして行ったのかが何となく疑問であった。子供の頃に読んだ話では‘金売り吉次’と記憶している。金売りを金商人といいかえたのであろうか。金物屋では金を売っては無く、鉄製品を売っている。これより、金売りは鉄売りではないかと考える。また、義経は鞍馬天狗に剣術を学んだことになっている。鞍馬天狗からは、修験道が連想される。

京都の北山には、鞍馬寺の他に、常照皇寺・峰定寺(花脊)・阿弥陀寺(古知谷)などがある。また、山からは、修験道の他に、山師・木地師なども浮かんでくる。これらのネットワークに吉次がかかわっていたのかと思われる。

あとがき

京都市の南の端と北の端をとりあげることとなった。正確には、御香宮と峰定寺であろう。コロナ禍前には、千本鳥居が河原町並みの人出になるなどは信じられなかった。

鞍馬寺に行くのは、出町柳から叡電に乗るのは今も70年代も同じである。学生時代に伏見稲荷に行ったときは市電で行ったが、75年の場合は記憶にない。C2で引用したWikipedia「京都市電」の記事からは、稲荷線は1970年に廃止されたから、京阪を利用したはずである。

学生時代に市電を利用したのは、速度が遅く景色を見易いことと、三条から京阪を利用するより安かったことによると記憶している。

ここで、京都の市バス・市電の運賃改定を「[京都市交通局のあゆみ～年表](#)」より抜き出してみた。

1951/12/25	市バス 1区 15円	市電 10円
1953/7/15	市バス 1区据え置き, 2区 25円, 3区新設	市電 13円
1965/1/16	市バス 1区 20円	
1968/1/16	市バス均一区間 30円	市電 20円
1972/8/1	暫定運賃 市バス均一区間・市電	40円
1973/4/1	市バス均一区間・市電	50円

1975/8/1 暫定運賃 市バス均一区間・市電 70 円

1976/4/1 市バス均一区間 90 円・市電 90 円

1978/6/1 市バス均一区間 100 円

現在 市バス均一区間 230 円

2024 年度ごろに初乗り 250 円を検討